

日吉台地下壕保存の会会報

第82号

日吉台地下壕保存の会

2007年度 総会のお知らせ

日吉台地下壕保存の会が発足して19回目の総会を下記のように開催します。

1年の活動の区切りの総会ですがあっという間のこの1年でした。この何年間は運動が活発になり、ガイド養成講座、港北ふるさとサポート事業、ガイド本の出版、それに一番大切な地下壕見学会と目の回るような忙しさでした。その結果、多くの人に日吉台地下壕保存の重要性を伝えることが出来ました。皆様のおかげだと思っています。慶應義塾の協力もあり地下壕の保存は出来るようになりました。

今年度は保存運動の質的な発展を考えています。それは日吉台地下壕平和資料館建設です。地下壕の資料を常設的に展示できるスペースの確保です。その建設に向けて構想を練り、その準備し、資料作りを始める初年度としたいと思っています。その意味で今年度は重要な総会と考えています。何とぞ出席いただいて活発な議論をお願いします。

日時：2007年5月19日(土) 午後13:30～16:00

場所：慶應義塾大学日吉キャンパス 藤山記念館会議室

内容： 講演会 13:30～15:00

演題： 「諸大学における戦没者の追悼」
(慶應大学にふさわしい追悼のかたちを考える)
講師 白井 厚 慶應大学名誉教授

総会 15:00～16:00

なお、当日地下壕見学会(10:00～12:00)を予定しています。
地下壕見学会を希望する方は5月12日までに必ず見学窓口に申し込んでください。
見学申込先 TEL&FAX 045-562-0443 喜田

慶應義塾大学日吉寮と谷口吉郎

中澤 正子

2006年11月に開催された「横浜・川崎平和のための戦争展」で寄宿舍の設計者谷口吉郎に関する展示をしましたので、誌上でその一部を再現してみたいと思います。

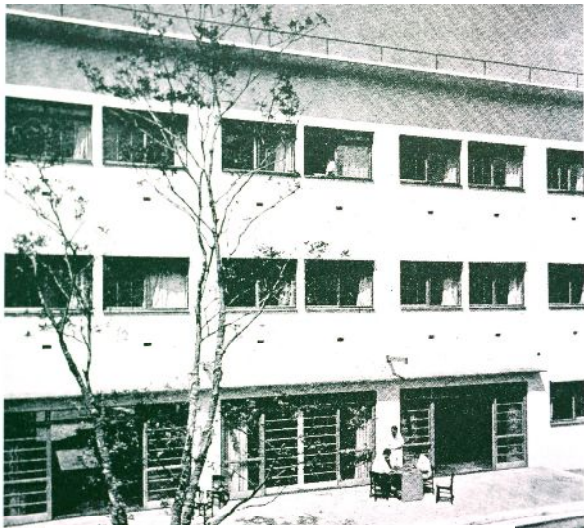
■理想の学園にふさわしい建築 日吉寮

昭和のはじめ、慶應義塾は東京横浜電鉄から約7万坪の土地の寄付申し出を受け、日吉に「理想的学園」を建設するため動き出します。現在の日吉キャンパスの整然とした銀杏並木や櫟並木、校舎の配置をみてもその意気込みが伝わってきます。昭和9年第一校舎が竣工、続いて第二校舎が11年に完成します。

日吉寄宿舍は昭和11年9月に着工し12年9月に竣工します。寄宿舍建設に当っては谷口吉郎という新進の建築家が起用され、この建築家が「学生都市の新しい生活形式を実現したい」と理想に燃え心をこめて設計し完成します。このように日吉の丘は理想の学園建設のただ中であつたのです。

慶應義塾の建物の中で最初に谷口が手がけたものは幼稚舎校舎で、当時の榎智雄理事が「塾の建物に魂を入れてほしい」と設計を依頼したことが始まりと知り、「建物に魂を入れる」という考え方に心を打たれました。谷口は次々と校舎や学生ホール、病棟などを手がけます。い

慶應義塾大学日吉寄宿舍 1938

日吉寄宿舍
上から北寮、中寮、南寮

日吉寄宿舍

つも魂をこめて仕事に取り組まれたことと思います。

このような先人達のひとかたならぬ思い入れがあつて完成した建物が、戦中・戦後の荒廃した時代を通りこして、ぼろぼろになりながらも生命を保っています。その力強さは建設当時の人々の澄み切った精神力そのものではないでしょうか。

本年の展示に「慶應義塾大学日吉寮と谷口吉郎」のコーナーを設けたのは、建築家の心にふれ、理想的な寄宿舍をもう一度見直し、末永く建物の生命が保たれることを皆さんと一緒に考えたいと思ったからです。ご一緒に考えましょう。

★略歴

明治37年金沢市に生まれる。大正14年第四高等学校卒業、東京帝大工学部建築学科入学。昭和6年東工大助教授。13年欧米に出張、外務省嘱託。17年「建築物の風圧に関する研究」に対し日本建築学会学術賞を受賞。18年工学博士号を受く、東工大教授。24年藤村記念堂その他に対して日本建築学会作品賞を受賞。32年毎日新聞社刊『修学院離宮』に対して毎日出版文化賞を受賞。36年東宮御所その他の業績に対して日本芸術院賞を受賞。37年日本芸術院会員。40年東工大教授を定年退官、同大名誉教授。44年文化庁文化財保護審議委員。48年文化勲章を受章。49年『建築に生きる』刊行。54年死去。

(『建築に生きる』谷口吉郎著 日本経済新聞社 1974に加筆)

★『慶應義塾と建築家・谷口吉郎』 藤岡洋保著より

*慶應義塾と谷口 1932年(昭和7)頃、慶應の理事榎智雄が東工大助教授の若い谷口を訪ね「塾の建築に魂を入れてほしい」と幼稚舎校舎の設計を依頼したのがきっかけで、その後40年以上にわたり、折に触れ設計を依頼。谷口自身も『建築に生きる』に「慶應義塾と私」の章を設け、「慶應義塾の出身ではない。しかし、塾との関係は長く続いていて、四十数年に及ぶ。そのため塾員となっている」と述べ、「私の関係した建築は多い。戦後の苦しいときであったので、いっそう私には励みとなった」と記している。非常勤で文学部の美術史学の専攻で建築史の講義を隔年で続けていた。

*幼稚舎とその校舎 幼稚舎の教育は先進的で、1898年(明治31)には児童の生活様式を洋式に改め、1910年(明治43)には理科教室・実験室が新設された。英語教育や図画・唱歌の特別実習、林間学校など情操教育も充実していた。

その校舎は鉄筋コンクリート造り3階建て、「健康第一主義」で採光と通風に配慮。上階をセットバックし、1階から3階まで教室からそのままテラスに出られ、暖房はパネル・ヒーティング、父兄の反対があったようだが結局喜ばれる設備となった。

*慶應義塾の谷口作品 幼稚舎校舎(曾禰中條建築事務所と共同)1937、幼稚舎講堂(自尊館)1964、幼稚舎百年記念棟1976、大学予科日吉寄宿舍1937、普通部校舎1951、第二研究室(萬來舎1951、イサム・ノグチ制作の談話室あり、2003解体)、医学部基礎医学第三校舎1957、慶應義塾発祥記念碑1958ほか。

*日吉寄宿舍 高台の南端に3棟がやや扇形に開くかたちで配置されており、シンプルな箱形で、横長窓が整然と並び、西妻側の避難階段で変化がつけられていた。当時としては珍しい1人1室、1階西側に食堂と談話室、食堂からテラスに出て、食後の会話が楽しめた。南西端に円形の浴場があり、大きなガラス窓やテラスから眼下の景色を一望できた。寄宿舍棟は直方体、浴場は円筒形、機能別に異なる形を与えてその組み合わせを重視するという、近代(主義)建築の教義や美学にしたがったデザインといえる。



寄宿舍の内学生の部屋

(慶應義塾大学アートセンターブックレット 13「記憶としての建築空間」より)

★「設計日誌の一節」にみる谷口吉郎の想い

「塾の榎さんから今度建つ寄宿舍のお話があって、土地を見に行くことになった」「市中から出て来て広い日吉の空を仰ぐ気持はいゝ」「舗装道路を過ぎ自動車の車が土の中にめ入り込む位奥まった所で、『ここが予定地です』と云われ車を下りる」「静かな雑木林の丘なので、まづ『これはいい』と思ふ」「三方とも崖になった高台なら『ますますいいぞ』とつぶやき」「足の下には一面に広い平野が、遠く横浜や



寄宿舍南西端の円形の浴場

鶴見らしいあたりまで続いてゐる」「今までの広い平野から深閑とした森の丘陵に変化する」帰途、車中で頭の中にデッサンが描き出されて来る「幼稚舎で試みたパネルヒーティングを再びこゝでも成功させたい希望や、日頃から考へてゐる学生都市の新しい生活形式をあの見晴らしのいゝ丘の上に、一つ実現してみたい願望などが盛り上ってくるのであった。

そしてその描想の中で、さっき崖の上から見下ろした広い桃畑に、美しい花が咲き出し満開して来るのを禁じ得なくなった」。(「設計日誌の一節」谷口吉郎著 国際建築 14-1 別刷

「慶應義塾大学日吉寮開設五十年記念誌」より

★日吉寄宿舍はインターナショナル・スタイルの代表的な建築物

『世界大百科事典』の谷口の項によれば、「第2次大戦前には西欧近代建築様式の数少ない理解者として慶應義塾大学日吉寄宿舍などの作品をのこしたが、渡欧を契機に日本の伝統的建築様式の追求に主題を改め」とあり、この時代の建築スタイルを象徴する重要な建物であることがわかる。

★寄宿舍の完成・設備・費用等

昭和12年9月10日開舎式。1棟40名収容、南寮、中寮、北寮の3棟南向き。各棟に舎監・副舎監各1名そのうち医師1名。

食堂、配膳室、談話室。別棟に炊事室、浴室(円形)、娯楽室。パネル・ヒーティン(床下温水暖房)、水洗式トイレ。

1室1名約6畳の洋室、寝台、机椅子、本箱、洋服箆笥、電気スタンド、洗面台、寝具一式(シーツ類は洗濯付)等。

舎費年額180円、食費月額21円(かけ蕎麦15銭、大卒初任給30~40円の頃)

(「慶應義塾大学日吉寮開設五十年記念誌」より)

■日吉寄宿舍の閉鎖。連合艦隊司令部。戦後の接收。現状。

昭和19年4月新入舎生を迎えたが、帝国海軍連合艦隊司令部に貸与されるところとなり、寮生は退寮、転居していく。その大半が戦地にかりだされ、再び慶應義塾に帰ることのなかった者も多いという。

学生がいなくなった寄宿舍には9月29日連合艦隊司令部が入り、地下に巨大な地下壕を掘り、地上と地下を利用して20年8月15日まで太平洋戦争の作戦を練ったのである。

現在、中寮だけが寄宿舍として利用されている。谷口吉郎の理想とした学生都市はわずか7年で崩壊した。

あれから60数年がたち損傷の激しい3棟の寄宿舍ではあるが、これからもずっと谷口の理想を語り、戦中の苦難、戦後の連合軍に接收された時代を語る生き証人として生命を保っていて欲しい。

報告

「港北寄りあい処」報告

2007年度「港北ふるさとサポーター事業」の活動報告会「港北寄りあい処」が3月17日慶應大学日吉キャンパス来往舎で開催され、助成対象となった、交流・教育・文化・歴史など様々な分野で活動する16団体が1年間の成果を発表しました。日吉台地下壕保存の会も運営委員の亀岡敦子さんと渡辺清さんが活動の報告を行いました。地域の分野の違うグループとの交流も生まれ、有意義な取り組みだったと思っています。

報告 1年間の活動内容

- 7月 ガイドブック増刷(3000部、1000部を小中高に)
- 8月 ガイド講座の準備
- 9月 講座チラシ配布、会報などでも案内
- 10月 第1回ガイド養成講座 日吉台地下壕見学・「日吉の戦争遺跡の特徴」話し合い アンケート
- 10/1 自然観察会
- 10/29 絵画教室

港北地区 港北42丁目 平成15年3月27日 休刊

ふるサポ2年目 成果を発表

慶大日吉キャンパスで「港北寄りあい処」

まの身近な課題解決や魅力づくりに取り組む市民団体に補助金を助成する「港北ふるさとサポーター事業」の活動報告会「港北寄りあい処」が17日、慶大日吉キャンパス内で開かれた。参加者が集まった。

平成17年度から始まった港北区独自の助成金事業「ふるサポ」3年度目となった報告会には、今年度の助成対象となった16団体のメンバーと多くの一般参加者が集まった。

会では16団体がそれぞれ持ち時間を利用して、ポスターやスライドを使いながら1年間の活動を発表。港北区の景色やイベントを映像で記録し、地域のコミュニケーションを広げる活動に取り組む「ワックショブ・プロジェクト」はこの1年間で実際に記録・編集した映像を上映。参加者の注目を集めた。その他、子育て支援や居場所づくりなどに取り組む各団体が活動の成果を発表した。

また、参加者の投票で決まる今年度の「ふるサポ大賞」には、「子どもの本の読み聞かせ」が選ばれた。会の終了後、区の担当者らは「活動団体が自主的に共同イベントをやるなど、横の繋がりができてきたことが素晴らしい」と話した。

▲限られた時間の中で成果をアピールした

11月 第2回ガイド養成講座 学習会「日吉の丘の青春群像」他

11/21～25 第14回平和のための戦争展（展示・シンポジウム・講演・絵画展・紙芝居）

12月 第3回ガイド養成講座 学習会「近代戦争の拠点としての神奈川」他

1月 第4回ガイド養成講座 箕輪方面の見学 講演「歴史を見つめ、未来を拓く」アンケート

○ガイドブックを配布する対象の小中高校は3月2日までに13校を案内し、用意した1000部はほとんどなくなった。

○平和のための戦争展はどの部門も高い関心が示され、新聞報道もされた。

毎年、日吉台地下壕保存の会と蟹ヶ谷通信隊地下壕を保存する会、登戸研究所の保存運動グループが実行委員会形式で続けているイベントで今回で14回目。内容は「戦前・戦中・戦後の教科書の展示 墨塗り教科書も」「日吉台地下壕関係の展示 発掘された罫子なども」「蟹ヶ谷地下壕」「登戸研究所」「市民が描いた戦争の記憶」「紙芝居 満蒙開拓青少年義勇軍とシベリア抑留の体験を伝える」「シンポジウム 戦争観と追悼を考える」「ひとりがたり下級兵士がみた沈没戦艦武蔵の最後」「靖国神社と憲法 田中伸尚氏」

○ガイド養成については、講座とそれに続く見学会のサポート実習を行っているが、少しづつだが、幅広い年齢層のガイドが育っていると思う。受講者は昨年度2名 今年度3名が見学会のサポートに参加している。

<活動に対する自己評価>

「ふるサポ」に参加することで私たちの活動をより多くの人に知ってもらう事ができ、作成したガイドブックは2005年度2006年度あわせて6000部になるが、2007年3月現在、小中高校への配布と一般見学者の資料としてほぼ使い切った。8月に平和文化社から発行したブックレットの売れ行きもよく、（地元書店のベスト10に入った月もあった）戦争遺跡に対する地域の人たちの関心の高まりを感じている。今年の講座参加者は少なかったが、ゆっくり学習でき、戦争展にも講座の一環として参加してもらった。成田富男さんの紙芝居も好評だった。「ふるサポ」参加2回目で活動の実りを感じると共にこれから必要な活動がようやく見えてきたように思う。

<今後の課題、活動>

今回できなかった日吉台地下壕以外の地域ウォーキングや他地域の戦争遺跡見学ツアーなどを実現させたい。見学会の希望が増加しているのでさらに多くのガイド養成が必要。

ホームページの活性化。定例化してきた小中高校生のわかりやすい案内の工夫。

運営委員 喜田

報告

日吉の戦争遺跡ガイド養成講座 PARTII アンケートについて

ガイド養成講座 PARTII は4回の講座で終了した。提出して頂いたアンケートから皆様の率直な意見が聞かれ、運営委員一同安堵と反省の狭間にいる。安堵は終わったという思いであり、よかったと言ってくださる方がおられたこと。反省はPARTIの緊張感、充実感が我々に乏しかったことで、受講者にはもっと切実な問題であったと思われること。今後どう展開してこの講座を継続していくか、アンケートから皆様の真剣な気持ちを汲み取り、双方が満足できる講座を実施していきたいと思う。

受講者のアンケート 概略

◆*日吉に約20年住むが殆んど地域との関係はなく戦争遺跡も全く知らなかった。これから地域に密着した生活をしたと参加した。“きっかけ”ができ、運営委員に感謝。

*ガイドは目的を明確にしないと出来ない。渡辺さんの講演はそれを明確に示しており、大変参考になった。やはり個人の理解に立った方法を持つ必要を感じる。

＊まだガイドを進んでやろうと思わないが、ガイドをするにはもっとより正確により深く戦争を理解しなければならない。それを少しずつ進めたい。今は案内を頂き可能なものには参加したい。＊我々がグループで議論できる場があれば良かった。次回はそれを願っている。

S 記

◆＊地下壕を見学でき有難い。＊地下壕を見ただけでは戦争の異常さ、悲惨さは見えて来ない。若い世代に問題提起をしていく必要あり。＊渡辺先生の講演を聴くことができよかった。

S 記

◆＊これで終了でなく出発点として勉強する。＊同期受講の20余名が1つのグループとして今後も活動しては？ ＊受講生同志が話し合う機会を設けてほしい。＊他の場所の見学会をお願いします。＊子供達には手を加えない正しい歴史を伝えたい。K 記

◆＊自分にとって新しい知識は何一つ得られませんでした。特に今日、歴史認識にイデオロギーを持ち込む赤の講演は最低ですね。＊戦争である以上各国により――止めます。何書いても無駄だし。＊現実問題として自分にガイドはできそうもありません。今後も自分なりの戦史研究を続けます。S 記

◆戦争遺跡を知り、戦争を再確認すると共に皆様方の考え方、ご意見を聞くことが出来よかった。S 記

◆＊入会して4ヶ月、何か少しでも出来れば幸いだ。＊若い人達に戦争の実相を伝えていく事が大切と思うし、現在の日本がどのような状況に有るのかと言う点をお互いに分りあえたらと思う。＊軍事力では解決出来ないという事を過去の戦争の反省として何事も話し合いしれないと認識したい。B 記

◆＊4回のご指導有難うございました。説明を受けた事を整理して自分なりに「ガイド」のポイントをつかみたい。＊「ガイド」の意識に立ち見学ツアーで廻り、自分なりの「実習(研修)」を試みたい。＊自分なりにも色々関連情報を集めて、説明の幅や応用を広げていきたい。＊以上の経過を経て、どこか担当部分をもって実際にやってみようと思う。N 記

◆＊講師の方々がよく調査し勉強されていたので大変参考になった。＊観念的に戦争反対や平和というのではなく、戦争の事実をよく調べ、そのむごさ、悲惨さをありのままに知らせていくことが肝要と思う。＊この種のことに関心を持ち、いろいろの角度から戦争の事実関係を調査していきたい。＊話上手でないので「ガイド」はむかない。＊戦争と平和につき考え直す機会が多くなったが、「保存の会」の皆様とは考え方が若干ズレているか違うように感じられる。I 記

◆＊戦争の被害とか、だまされた、ごまかされたという受身の立場だと平和を守れない。＊だます側、戦争に国民をひきずりこむ権力者、軍人、財界がどのようにだまし、ひきずりこんだのかを私達は学んで、だまさせないための知恵をつけなければならないと思う。＊日吉台の海軍壕はそういう戦争推進側がどこで何をしていたのかをとらえかえすのにふさわしい場として生かしていきたいと思う。Y 記

◆＊憲法改正の国民投票法案の話の中で、今の案のままでは少数の賛成者数で可決される危険性があると聞いた。＊安倍首相の“憲法改正”“美しい日本”という言葉を聞くと日本が危ない方向に向っているのではと感じる。＊身近な所に戦争遺跡があることで、常にあの戦争の恐ろしさを忘れないきっかけになると思う。＊渡辺先生がおっしゃっていた国民投票法案は巧妙に少数の賛成者数で決る“だまし”、国民をなめた法案のようだ。この事はマスコミで取り上げていないのが実情で、大切なことは報道からシャットアウトされている。＊日本がドイツのように戦争の責任を明らかにしなかったことが尾をひいている。＊今後もコンタクトをとって勉強させて頂きたい。T 記

◆地下壕の話を会社ですべて知ってもらっている。見学は仕事の関係で難しい。＊靖国について天皇に対して協力した軍人のみがまつられていることがわかった。I 記

◆4回参加しいろんなことを知らされた。今後も若い人々にも伝えていく上で、連絡してもらえる状況を作っておきたい。＊いろんな人々にも考えてもらい、話し合う場を持つことで、

過去の戦争に対する歯止めになるのでは？ ＊世の中は悪い方向に向っている。60年代は学生運動から市民・労働者を問わずデモクラシーに参加しないと、恥ずかしい位いろんな人々が参加されたが、今はこういう集まりが出来にくく、テレビも面白おかしく家の中にクギづけにしてしまう傾向がある。市民の楽しみ方、視点を変えさせられている世の中が恐ろしく思われるこの頃だ。T記

◆「若者へどう伝えるか」という質問でしたが戦争を知らないという点では「横ならび」だと思う。教育を受けていない共通点で「共に学ぼう」という視点でやるべき。＊天皇の責任を問わなかったことが今に長引いている。＊南京の記念館に行ったが、入るなり最大の責任者上海司令部朝香宮（目黒にある東京都美術館が旧宅、明治天皇の娘婿）の写真がはられている。私達日本人には知らされていない。こういう点も伝えていきたい。I記

◆前年と2回講座を受けた。現在簡単な場所の説明をさせてもらっているが、全体的に説明出来るよう頑張りたい。＊父方の本家（金蔵寺そば）が戦争で焼けたのが分り、説明の中で話した。＊武蔵山（第33代横綱・日吉在住）の話はどうか。

運営委員 渡辺

報告

日吉の戦争遺跡ガイド養成講座 PART II

第4回最終回 2007年1月20日(土) 10.00～16.00

▲ 日吉の戦争遺跡を歩く その2 艦政本部地下壕ほか

小雪ちらほら寒い。午前中は日吉駅西側の日吉ゆかりの人の跡と戦争遺跡を歩く。先ず、日吉駅前近くの公爵嵯峨邸（令嬢浩の夫は愛新覚羅溥傑—満州国皇帝溥儀の弟）を見て、日吉台小学校へ。

1940（昭和15）年日本一の小学校建築と言われた新校舎が完成。喜びも束の間、日本は太平洋戦争に突入。1944年学童疎開が始まり、校舎は海軍に接収され海軍省人事局功績調査部が入る。そして1945年集中爆撃を受けて全焼。校庭には資料保存用と思われるコンクリート造りの建造物が戦後まであったと言う。

本道を右にそれ少し上った所に、多くの俳優を育てた新派俳優井上正夫が住み、演劇を勉強していた道場跡があり、高橋誠一郎慶大教授揮毫の「井上正夫之碑」を見る。赤門坂を下り、プレジデンスエグゼ等マンション群脇の坂の途中で、艦政本部地下壕建設を請け負った三木組事務所と朝鮮人労働者の飯場について説明を聞く。

急な階段を上り慶應普通部横を通り、通称八十階段を下り箕輪町の竹やぶに入ると、地主さんより「勝手に入らないよう」注意を受ける。今後の連絡方法など話し合い竹やぶに入る。戦時中使用された水槽と今は塞がれている艦政本部地下壕入口を見学。

大聖院では小嶋萬助の墓と戦災にあった樹木の説明を聞き、午前中の見学会を終る。

▲まとめ ガイドとして必要な視点「歴史を見つめ、未来を拓く」講師：渡辺賢二氏

午後は、来往舎会議室で、明治大学講師渡辺賢二氏による表記の講演があった。はじめに「男23.9歳、女37.5歳は何を表しているか？」と問いかけがあり、「1945年の平均寿命。短命であるのは戦争が関係している。平和とは戦争がないだけでなく、世界中が等しく豊かになること」と。また権力者がおこなう統治手段は「だまし、ごまかし、おどかし、ならし」であることをつかみ「だまされない、ごまかされない、屈服しない、あきらめない」ためにどうしたらよいかと次ぎの内容を話された。

（1）歴史と戦争を見つめる意味 ①「靖国神社」をめぐる諸問題は近現代日本の歴史認識の焦点、②戦争遺跡から戦争の実相を見る難しさと大切さ（日吉台地下壕、登戸研究所は軍事基地遺跡）、③戦争遺跡を過去の遺物と見るのではなく、そこから平和な社会を創る力を生み出す必要がある。

（2）戦争の異常さを知り平和を創る力を ①戦争の伝え方として戦争の呼称を考える、②

アジアからみる戦争、③戦争の構造の異常さと現代の関係を考える、④戦争に反対した人たちから学ぶもの、⑤戦争の反省から生まれた国連憲章・日本国憲法9条こそ未来を拓く羅針盤。と説かれ、

おわりに「不安、不信、孤独、孤立そして戦争」の社会が再び進行している中で、「安心、信頼、協力、協同、連帯そして平和」な社会の創造を。と呼びかけられた。

▲最後に質問、感想等の意見を述べ合い、講座に対するアンケートを記入し、閉会となった。今回の講座からも、ガイドをやってみたいという人が出てくれればと思った。

お知らせ

特別見学会〈靖国神社・遊就館〉と〈登戸研究所〉のお知らせ

1) 靖国神社・遊就館見学

日 時 2007年6月16日(土) 午後1時～4時
 講 師 東海林 次男 戦争遺跡保存全国ネット運営委員
 参加費 資料代300円 ほかに遊就館入館料800円が必要です
 集合場所 靖国神社大鳥居下
 地下鉄九段下駅(都営新宿線・半蔵門線・東西線)

2) 登戸研究所見学

日 時 2007年7月21日(土) 午前10時～12時
 講 師 渡辺 賢二 明治大学講師
 参加費 資料代300円
 集合場所 小田急線生田駅改札前

- 参加人数と年齢の制限はありません。
- 小学生以上なら参加できますが、説明を受けながらかなりの距離を歩きます。
- 少雨の場合は実施しますが、中止の場合は2時間前までに電話で連絡します。
- 参加申し込みは、実施日の一週間前までに、葉書かファクシミリでお願いします。
 参加者全員の氏名と代表者の電話番号をお書きください。

○申し込み先 223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 亀岡敦子
 T&F 045-561-2758

投稿

矢上地下壕調査報告

千葉 毅(慶應義塾大学大学院)

はじめに

本稿は2006年10月に慶應義塾大学矢上キャンパス付近で発見された二箇所の地下壕内部測量調査報告である。これらの地下壕は道路沿いの擁壁工事に伴って発見されたものであり、10月8日、10月29日に桜井準也(慶應義塾大学文学部助教授)、下島綾美、千葉毅(慶應義塾大学文学部4年)の三名によって記録保存のための測量調査が行われた。調査にあたっては慶應義塾大学矢上キャンパス管財課、横浜土木事務所、日吉台地下壕保存の会にお世話になった。

1. 地下壕の測量調査

地下壕は2地点から発見された。いずれも慶應義塾大学矢上キャンパスの南方約50mの位置に北西―南東方向に走る道路沿いの丘陵斜面にあたる(図1)。このうち東側の地点からは、小規模の地下壕が二つ確認されたため計三つの地下壕(1～3号地下壕)が新たに知られることになった。以下、順に詳細を述べていきたい。

1号地下壕は、10月8日に調査されたもので今回発見された地下壕のうち最大である(図2・4)。入口は道路に面しており、道路より1m程高い位置にある。入口は当初三箇所あったようだが、一箇所は戦後に塞いだと思われる土砂と崩落土によって完全に埋没しており、残っている二箇所も同様の土砂や最近のゴミが投棄され狭くなっている。

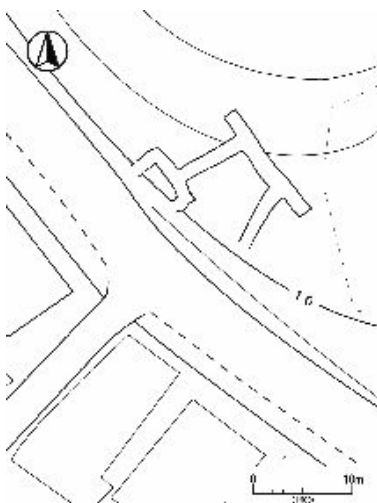


図2 1号地下壕の現況

通路本体は幅約150～180cm、天井高約210cmで全体的にほぼ均一であるが、交叉する箇所は天井が他より10cm程高くなっている。壁には合計八箇所に浅い掘り込み

が確認された。規則的に配列されているものではなく配電施設等ではないと考えられるが、これらの掘り込み以外にも、壁にささっていた棒状のものを抜き取ったような痕跡が数箇所認められたため、何らかの施設が設置されていた可能性は十分考えられる。一方、やや大きめの掘り込み(60×30×30cm)がされている箇所も最奥部付近より確認された。こちらは割

合正確な直方体に掘り込まれており、箱状のものの収納に用いられていたことも考えられる。また、通路には一部壁に沿って簡易な側溝が付されている部分があるが、大半は壁からの崩落土に埋もれてしまっており全体に設けられていたかは不明である。現存する総延長は約37mであり、全面に掘削の際の鶴嘴やスコップの痕跡が残っている。

2・3号地下壕は10月29日に調査されたもので、道路より約40m北へ入り込んだところに入口がある(図3)。これらは入口部が近接していたため発見当初は一つの地下壕と推測されていた。全ての入口は1号地下壕と同様に土砂が堆積しており、狭くなっている。特に2号地下壕の西側、3号地下壕の入口は狭く、内部に入るのはやや困難であった。ともに1号地下壕に比べ小規模であり、作りも簡

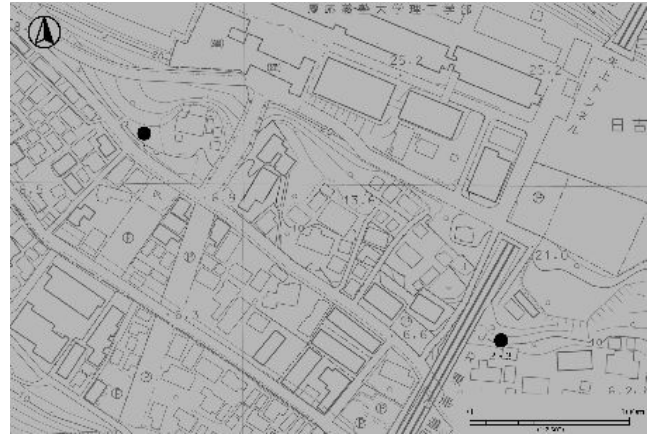


図1 地下壕の位置



写真1 1号地下壕内部



図4 1号地下壕測量図

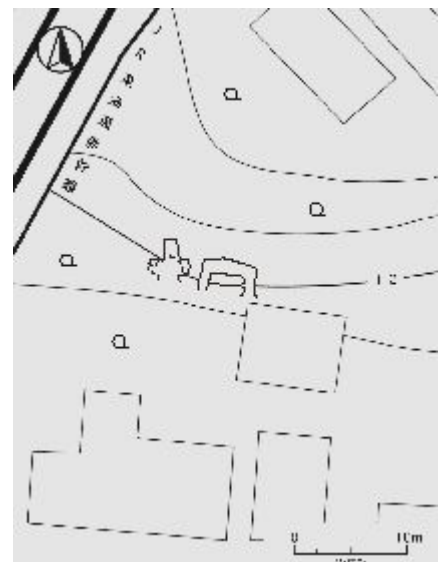


図3 2・3号地下壕の現況

素である。

2号地下壕は、コ字形で通路幅は入り口部が約90cm、奥が約120cm、天井高は約120cmであるが、壁面、天井ともに多く崩落しており全体的にやや歪な印象を受ける(図5)。東側の入口部は部分的に重機による削平が及んでおり、残存していない。床面はほぼ全面が崩落土によって埋没している。残存する壁面、天井部分にはほぼ全体に掘削の際のスコップ痕が認められる。総延長は約6mである。



写真2 2号地下壕内部



写真3 3号地下壕内部

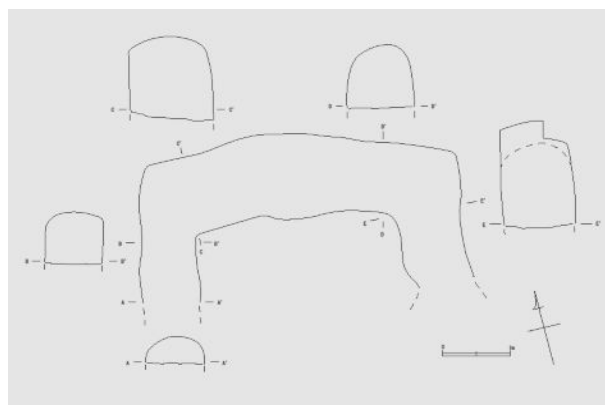


図5 2号地下壕測量図



図6 3号地下壕測量図

3号地下壕は入口付近より三方向へ分岐する形状を呈しているが(図6)、崩落が激しく、特に入口部はほとんど掘削時の形を残していないものと思われる。正面へ延びる通路は約350cm、左右へはそれぞれ約150cmである。通路幅は約130cm、天井は崩落が激しいが、約120cmの高さである。2号地下壕と同様に、残存部にはほぼ全面にスコップ痕が認められるが、壁面、天井自体の作りは粗く不整形である。総延長は約4.3mである。2号地下壕とともに、1号地下壕にあったような壁面への掘り込みなどの痕跡は確認されなかった。なお、1～3号地下壕は全て標高約10mに位置している。

2. 地下壕の性格

以上、三つの地下壕が近接する場所から発見されたが、これらの性格はどのようなものと推定されるであろうか。1号地下壕は、その規模や掘削の熟練度より、いわゆる「防空壕」ではなく、湘南地域から横浜地域にかけて多く分布する、本土決戦を想定して構築された「戦術用地下壕」に該当する可能性が挙げられる(桜井1999)。壁面に存在していた何らかの施設と思われる掘り込みもそれに関連するものと考えられる。2005年には同様の規模の地下壕が慶應義塾高校東側より発見されており、類似した性格のものと想定される(桜井2005)。一方2・3号地下壕は規模や構造の不整形さなどから、戦術用地下壕とするよりむ

しろ民間の「防空壕」と考えたほうが理解しやすい。しかし、これらの地下壕掘削の経緯や当時の状況に関しては今のところまったくわかっていないため、現段階でその性格を詳細に知ることは困難である。

周知の通り、この一帯には連合艦隊司令部地下壕、軍令部第三部（情報部）地下壕などの旧海軍の地下壕が存在するが、今回報告した

ような小規模な素掘りの地下壕も発見され、戦時中の状況を偲ばせる。また、未発見の地下壕が今後発見される可能性も十分に考えられる。既に戦後 60 年が経過し戦争の記憶が世間から忘れられようとしている中で、これらの遺構一つ一つにその規模や用途を問わずに向き合い歴史を紐解いてゆくことは、遺された我々にその進むべき道を示してくれるはずである。

参考文献

桜井準也 1999 「発掘された戦争遺跡―藤沢周辺の遺跡から発掘された「防空壕」について―」『湘南考古学同好会々報』75号

桜井準也 2005 「慶應義塾高等学校購買部棟東側から発見された地下壕」『日吉台地下壕保存の会会報』74号

報告

京都から「安斎育郎先生と行く平和ツアー」をむかえて

京都の立命館大学国際平和ミュージアムは、世界で最初の大学立の平和ミュージアムであり、ボランティアガイドの方々が来館者の案内にあたっています。昨年12月4日午後、館長の安斎育郎立命館大学教授を先頭に、ガイドを中心とした平和ツアーの一行26名が、銀杏の黄葉真っ盛りの日吉キャンパスを訪問されました。志を同じくする遠来の客を、保存の会運営委員7名がむかえ、まず地下壕に案内しました。ほとんどの方が事前に冊子を読み、知識を持っていたにもかかわらず、想像以上の規模の大きさに衝撃を受け、様々な感慨を話してくれました。

その後、藤山記念館の会議室で、大変中身の濃い交流会を持ちました。安斎氏のミニ講演「安斎育郎が斬る現代社会」はわずか30分ながら、憲法、北朝鮮核実験、放射能殺人事件、教育基本法まで、縦横に語り、さすが日本中から依頼が殺到する講演の名人と、感銘をうけました。保存の会からは、新井が「神奈川の戦争遺跡」、亀岡が「日吉の丘の青春群像」についてのミニミニ講演をおこない、夕刻には中華街へと向かう皆さんを見送りました。短い時間の中でなんと凝縮された交流会であったことでしょう。後日頂いた感想文の中からひとつ紹介します。

運営委員 亀岡敦子

(ひとこと感想)

最初に訪れた日吉台地下壕がメインポイントなのでここに焦点を絞って述べたいと思う。

壕の立派さに驚いたのだが、よくぞここまでして戦争を継続しようとしたものだと思えた。それにしてもガイドの方がわかりやすい解説をしてくださったのにも感心した。いわゆる“聞かせるガイド”だということだろう。それから保存会が300名も会員を組織しているのもすごいことだし、保存に援助金をポンと出した慶應大も見直した。平和への関心は立命大だけではないことを知ったことが今回のツアーでの収穫でもあった。いろんなところで奮闘している関係者がいるということがわかったからである。(Kさん)

●活動の記録 2007年 1月~4月

- 1/16 地下壕見学会 法政二中同窓会・慶應大機械科19期 31名
 1/17 運営委員会 会報81号発送(慶應高校物理教室)
 1/20 第4回戦争遺跡ガイド養成講座 ①「日吉の戦争遺跡」箕輪方面の見学
 ②「歴史を見つめ 未来を拓く」渡辺賢二氏
 1/27 定例見学会 30名
 2/3 定例見学会(午前・午後実施) 44名
 2/10 定例見学会(午前・午後実施) 85名
 2/21 運営委員会(日吉地区センター)
 3/2 地下壕見学会 下田小学校6年生 138名
 3/5 地下壕見学会 田園調布学園(生徒・保護者・卒業生) 28名
 3/6 地下壕見学会 創価大学中野ゼミ 23名
 3/9 地下壕見学会 下田町自治会 40名
 3/16 運営委員会(日吉地区センター)
 3/17 港北区ふるさとサポーター事業「ふるサポ」活動報告・交流会 (慶應大学来往舎)
 3/19 平和のための戦争展 in よこはま実行委員会(かながわ県民センター)
 3/23 運営委員会 (慶應高校物理教室)
 予定
 4/20 運営委員会 会報82号発送(慶應高校物理教室)
 4/28 4月定例見学会

☆☆ 2005・2006年度の「日吉の戦争遺跡ガイド養成講座」の受講者が数名、地下壕見学会のガイドをはじめています。見学希望の個人・団体が増加している現在、地下壕の案内に協力して下さる方がもっと必要です。ガイドの実践を見学会のサポーターから始めませんか。見学会は下記の日程以外にも、見学希望の団体をウィークデイに案内しています。ガイドサポーター参加のご連絡は見学窓口までお願いします。 ☆☆

○地下壕見学会の予定

4/28 5/19 5/26 6/23 7/28

5月19日は午前10時から(午後は藤山記念館で2007年度定期総会)

8月は上旬を予定(8/21~27は大学事務が休みのため見学会はできません)

定例見学会は毎月第4土曜日に行っています。なお日程が変わる場合もありますので必ず見学窓口に申し込んでください。(見学申込先 TEL&FAX 045-562-0443 喜田)

連絡先(会計) 亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 TEL 045-561-2758

(見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町2-1-33 TEL 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://www.geocities.HeartLand-Hanamizuki/2402>

日吉台地下壕保存の会会報 (年会費) 一口千円以上
 発行 日吉台地下壕保存の会 郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 大西章 (加入者名) 日吉台地下壕保存の会
 日吉台地下壕保存の会運営委員会